

ライプニッツにおける神の仕事の表現法について

——幾何学・芸術・エコノミーの比喩——

丸山諒士 MARUYAMA Ryoji

凡例

ライプニッツのテキストの内、ゲルハルト版全集（Gerhardt, C. I. ed., 1875-90, Die Philosophische Schriften von G. W. Leibniz, Berlin, Bd. 1-7）を用いたものは、「Gローマ数字（巻数）：頁数」で表す。引用は邦訳がある場合、工作舎『著作集』に拠る。但し、本文と整合させるために一部表記を変更したものがある。またライプニッツの著作は細かく分かれた小品が多いため、頁数の後に以下の略号を用いて該当節数を入れることがある。（DM＝『形而上学序説』、T＝『弁神論』、T緒＝『信仰と理性の一致についての緒論』。

0. 序

本稿はG. W. ライプニッツが神の世界創造を比喩という仕方で表現することに注目し、この間接的表現を通して神の仕事について人間には何が分かるか、何が分からないのかを——ライプニッツ哲学の合理性解釈の一環として——明示することを目的とする。ライプニッツはしばしば創造者としての神を幾何学者、建築家、職人、一家を支える父等に、また遠回しには画家や作曲家に喩えて表現する。本稿はそれぞれの比喩が神の仕事の如何なる特徴を言い表すかという観点から、これらを幾何学的比喩・芸術的比喩・エコノミーの比喩の三つに分ける。この区分によって幾何学と芸術は対極的な特徴を有し、エコノミーはその中間に位置することを示す——但しこの区分は程度問題であり境界は曖昧である。エコノミーは古来より神の世界への関わり方を表す語として用いられてきた伝統を有し、かつ現代では或るものの運用の効率性（経済性）を表すべく用いられる興味深い語である。本稿はライプニッツ哲学における多様な比喩の比較検討を通して、このエコノミー概念についても考察を加える。

以下に本稿の構成を示す。1章ではライプニッツが神の最善世界創造という仕事をどのように考えているのかを確認し、同時に比喩

的記述も参照する。2章では前章で登場する多数の比喩を三つに分けて、その表現上の長所短所を指摘し(2.1)、その上で比喩を複数使ってこそ表せられると思われる神の仕事の「驚異」を示す(2.2)。3章では本稿の考察の現代的意義について極簡単に触れる。

さて本論に移る前に本稿が殊更に比喩に着目する理由を述べておく。それは最善世界説における「よさ」は第一に神にとってのよさであり、人間にとってのそれではないことに由来する。有限で不完全な被造物は、完全な創造者にとってのよさの決定や創造を厳密に理解することはできない。

私がこのような比較〔幾何学による神の世界創造の比喩〕をするのは、不完全ながらも神の知恵の似姿を描くためであり、少なくともわれわれの精神を高めて、言葉では十分に言い表せないことをいささかでも理解できるようにするためなのである。しかしこんなことで全宇宙が依存しているかの偉大な神祕を説明したなどと、言うつもりはまったくない。(G IV: 431-2, DM §6, 角括弧内は筆者による)

つまり比喩は有限な被造物が無限な神の知恵に肉薄するためのギリギリの手段なのである。ライプニッツは比喩による表現は不十分であることもしっかりと合わせて声明している。つまり比喩による表現は予め失敗が約束されている。本稿の特徴は、こうした比喩という表現方法が上手くいっている点と、不十分な点を明示することにある。

1. 神の作品・仕事

本章ではライプニッツの考える最善世界のよさの様態(1.1)、及びよさを決定する方法(1.2)という二点を簡潔にまとめる。この際それぞれにおけるライプニッツの比喩の使用も踏まえる。

1.1. 作品——悪が混じってこそ最善な世界

ライプニッツの最善世界説は、彼の死後すぐに「よい」のラテン語の最上級optimusに由来するオプティミズムという揶揄をイエズス会士から受けた。更に彼の説には「楽天主義」というオプティミズムの訳語に付随する通俗的なイメージが、ヴォルテールの『カンディード』(1759)によって加えられたことは有名である。ヴォルテールがこの本を書くきっかけになったリスボン地震という未曾有の大災害を前にして、この現実世界を最善とする教説——ライプニッツはこの時既に死んでいたが、それでも意見は変えなかったであろう——が受け入れ難かったであろうことは我々にも想像するに難くない。

しかしライプニッツの『弁神論』(1710)を少しでも繙けば、彼の最善世界説は楽天的な個人の期待に応えてくれるようなものではないことが分かる。何故なら個々の悪については、それらを単体で評価するべきではなく全宇宙との関係において相対的に考量すべきだと、ライプニッツは主張するからである。「神の国の真の大きさを考えるならば、悪は善と比べればほとんど無に等しく見えるはずだ」(G VI: 113, T §19)という言説は象徴的であろう。地球のとある地域での災害は、神の国たる全宇宙からすれば極微量なのである。しかし個々の悪を引き起こさないようなもっと善い世界を、何なら悪など少しも混じらない世界を、神であれば創造できたはずだ、と考えることはできる。これに対して彼は「いつも同じことを反論し答え続けるというのには、うんざりしてしまう」(G VI: 178, T §124)と言いつつ、次のように述べている。

もし、一緒に結び付けられているものをばらばらにし、全体から諸部分を、宇宙から人類を切り離し、神の諸属性を互いに切り離し、力能を知恵から切り離すとすると、神は一切の悪徳を混じえぬ世界に徳を存在させ得ると言うことも許されるし、神はそれをたやすくなし得ると言うことも許される。(G VI, 傍点は筆者による)

傍点を振った部分を見れば明らかなように「悪なき世界も可能な

はずだ」と言い得るのは、部分を全体から切り離してしまった時だけである。しかしこの世界の全てのものは互いに緊密に結び付いており、その緊密さは「もしこの世界に生ずる最小の悪でもそれが生じないとするならば、それはもはやこの世界ではないことになる」(G VI: 108, T § 9) 程である。従ってこの世界の諸悪は全体の最善と不可分なのである。そして『弁神論』では部分の諸悪は全体におけるより大きな善を補償していると考えられている。例えば苦痛のような悪は、より大きな悪を避けるためや(例えば肉体的痛みを伴う刑罰)、より大きな善を獲るためには許容される(例えばイエスの磔刑)(G VI: 116, T § 23)。それどころかライブニッツは人類総体における悪の善に対する優勢にさえ言及する。

たとえ人類においては善が生ずるよりも悪が生ずることの方が多としても、神にとっては、宇宙において悪よりも善の方が較べものにならないほど多ければそれで十分である。(G VI: 272, T § 262)

このように、最善とはそれに属する個々の要素の善の合計(或いは個々の善悪の差し引きの結果の善)の最大ではない。あくまでも最善なのは全体それ自体について言われるのであり、その全体に鑑みて部分の善悪が評価されるべきなのである。故に最善世界は「叡智的・被造物の道徳的善や物理的善のみならず、理性を欠いた被造物にも関わる形而上学的でしかない善も含む」(G VI: 242, T § 209)と言われる。逆に言えば、このあらゆる被造物に関わる形而上学的善も神の計画内に含まれるから、その善の増大のために結果として叡智的・被造物にのみ関わる道徳的悪(例えば罪)、及びそれ以外にも関わる物理的悪(例えば痛み)が生じてしまうことが避けられないのだ¹。

しかしながら以上の議論は、全知全能にして善意ある神は最善の世界を創造するというアプリアリな知識(乃至信仰)と、この悪を含む現実世界は確かに存在するという事実に関するアポステリアリな知識との両面作戦で成り立っている。つまり、悪が混じっている世界の方が純然たる善のみの世界よりも善いことについては、「この世界は確かにあり、これは神が選んだのだから悪が混じっていても最善だ」としか言っていない。有り体に言えばライブニッツはこ

ここでは論証や説明を何もしていないのである。だがこのことは知的態度として不誠実ではない。何故なら神がこの現実世界の有り様を最善と考えた理由の完全な把握など、もとより人間には不可能であり、ライプニッツが果たすべきことは端的に神の仕事に訴訟を起こす原告たちに抗して弁護することであるからだ²。

但しそれでもなおライプニッツは悪が混入した全体のよさを比喩を用いて印象付けることを怠らない。例えば陰影によって全体が際立つ絵画や、不協和音を含みつつ調和する音楽がそれであり、彼は現実世界の被選択性を着想し始めた当初からこれを利用している³。『事物の根本的起源』(1697)では饒舌に、絵画と音楽のみならず、恐怖感を含み持つからこそ楽しむことのできる綱渡りや剣舞、甘さ一辺倒では不味く辛・酸・苦も必要とする味覚の快樂といった比喩を使う(G VII: 306-7)。こうした比喩は、端から端まで全てがよいのでは千篇一律であり、むしろ善悪の抑揚が効いたものの方が心地良く感ぜられるという我々の直観に訴えかける——もっとも実際に苦を被っている個人が納得できるかどうかは分からない。また彼は「最小の費用による最大の効果」に基づく「決定理由」(G VII: 303)を神は持つと言い、ここにはミニマックス法的な発想があると思われる。

1.2. 仕事——善悪の調和した最善の決定方法

前節において我々は純然な善の世界よりも善悪混じり気のある世界の方がより善いことを確認した。しかしそうした善悪の「最もよい配置」を神が如何にして決定するのかは明らかになっていない。だが少なくともミニマックス法を念頭に置いていた時期のあることは明らかである。そしてこれに類似した最小-最大の発想をライプニッツは様々なテキストで展開している。曰く、神の世界創造は「無限に単純で斉一的でありながら無限に豊穡なる仕方」(G VI: 238, T § 204)であり、創造の計画には「最大の秩序を伴った最大の多様性」(G VI: 603)があり、創造される世界は「最も完全な世界、すなわち仮説において最も単純であるとともに現象においては最も豊富であるような世界」(G IV: 431, DM § 6)である。これらに共通しているのは、結果における多様性とそれらを秩序立って統率する方

法の単純さである。

ライプニッツはこうした単純な方法によって多様な世界を創造する神を「ある問題について最もよい作図を見つけることのできる幾何学者」, 「自分の地所と建物用の資金とを最も有利なように按配して, その建物が不快感を与えないように, またそれが示しうる美しさを欠くことのないように心がける立派な建築家」, 「自分の財産を, 手つかずのところや不毛なところがないように運用する一家の善き父」, 「できるだけ面倒のない方法を選んで効果をあげる熟練工」, 「できるだけ少ない紙数の中にできるだけ多くのことがらを書き記す著作家」(G IV: 430, DM §5, 傍点は全て筆者による)に喩えている。これらの中でもとりわけて最善世界の決定方法に関して簡潔明瞭な説明をしているのは幾何学者の比喩である。例えば,

幾何学の比喩を用いてみよう。一点から他の点へ引かれた最善の途(ここでは周辺の困難点や付随的事情は捨象しておく)は一本だけである。それは最短の線であり直線である。しかしながら一点から他の点へ至る途は無数にある。したがって直線を引かねばならないという必然性はない。しかし最善を選ぼうとするや私はその直線に決める。(G VI: 256-7, T §234)⁴

こうした幾何学の比喩⁵に関して妥当で分かり易い解釈を施したP. ラトーによれば、最善の決定とは*forma optima*を探すこととして理解されるべきである。つまり上の引用だと直線こそが二点間を結ぶ「最善=最適な形」である(以降「最善」と「最適」を使い分けるが、どちらも原語は*optimus*乃至*le meilleur*である)。

ラトーの主張において最も注目すべきなのは、「最善な形」と「最大/最小の形」の区別を明示化したことである。全能なる神にはいかなるものに関してもその程度をどこまでも大きく/小さくすることが可能であるから、最大/最小とは端的に不可能である。従って最善は単純な「最大の善」とは位相の異なる概念でなければならない(部分の善の加算が全体の最善ではなかったことを想起されたい)⁶。従って、ラトーによれば「最善の形」とは所与の条件(例えば単純な手段と豊富な結果)を最適に満たすべく、「最も決定されたもの(従って神の意志にとっては最も「決定する」もの)である。これは最も可知的

であり、最も合理的で、そして唯一のものである」(Rateau2015: 88)、また彼は最大／最小ではなく最善＝最適を追求することは「量から質への移行を可能にする」(Rateau2015: 88)と主張する。同時に「最適」の追求であるからして、神の世界創造には合目的性が導入されているとも言う(Rateau2015: 89)。

上の幾何学の比喩の場合偶然にも最適な形(直線)が同時に最小の形(最短距離)になっているが、追求されていたのは最小ではなかったことが重要である。幾何学の比喩は結果的に最適の形が最大／最小の形と同じになってしまい、「量から質へ」を上手く表現できない。そこで別の比喩を見てみよう。例えば「建築家」が目指すのは、量的な最大の建築とか最高額の建築とかではなく、或る目的(宮殿なら権威を示す豪華さ、城なら防衛力)に適う質的な「最善の形」を持つ建築なのである。或いは「一家の善き父」は目的(なるべく財産を増やす、なるべく遺産を残す等)に最適な財産運用をする、とも言えるだろう。

2. 最善世界説に関わる比喩表現

我々はライブニッツの最善世界説における神の仕事を確認する中で、幾つもの比喩表現も見えてきた。本章ではこれらの比喩を整理し、その上でそれぞれの比喩が相補的に協働しているという構造を明らかにする。最後にその協働から明らかになる神の世界創造の驚異の内実を明示する。

2.1. 比喩の三分

前章では取り扱った説明の順序に応じてその都度比喩に言及していた。本章ではそれぞれの比喩をそれらの表現上の特徴に応じて以下のように三つに区分する。

A) 芸術的比喩

一つ目は芸術的比喩であり、音楽、絵画、剣舞、綱渡り、味覚等がこれに属する。この比喩の特徴は、最善世界の「よさ」が善一辺

倒ではなく悪の混じった調和のよさであること、その部分の善悪は全体との関係において相対的に評価されるべきであること、部分の善悪の総計ではなく全体が最善であること、を我々の美的経験に訴えて上手く表現していることである。この比喩は「よさ」の美に関する直観に訴えかけるといふ点で伝達力において飛び抜けている⁷。しかしながら、直観的である分だけそれが最善たる理由については曖昧である。またこの比喩は基本的に最善世界の様子を表現するものであるため、最善決定の方法には無頓着である。これらの比喩において神は画家や作曲家であるはずだが、ライブニッツはそのような喩え方をあまりしない。その理由は、こうした芸術家たちの作品創造は以下で示す比喩が表す創造の法則性・単純性を備えているようには見えないからかもしれない。

B) 幾何学的比喩

二つ目は幾何学的比喩であり、二点間を結ぶ最善の形は「直線」であるとか、三角形の作図を命じられた場合は等辺三角形が最善であるとか (G VII: 304) といった比喩が属する。この比喩の特徴は、最善世界の「よさ」が、無限定な最大／最小ではなく形の最適さであること、他の選択もあり得る中でただ一つに決定されたものであること、を幾何学的作図が持つ単純性乃至法則性、及び計算結果の正確無比な唯一決定性に訴えて上手く表現していることである。しかしながら、この方法は結果として最大／最小を帰結してしまいがち (例えば最短距離) であり、最善性が量的ではなく、価値的な質の領域にあることを表現しにくい。また、計算結果の正確な唯一性が有する幾何学的必然性 (その反対が論理的に不可能である) は、ライブニッツが神の世界選択が有するとする「道徳的必然性」 (それ以外の選択は神の善意に反するが論理的に不可能ではない) と対置させるものであるため (G VI: 321, T § 349), 「神の選択は幾何学的に必然だ」と徒に誤解を招く危険性がある。更に、Aで確認したように最善世界の部分の評価は全体に対して相対的に為されなければならないが、幾何学においては部分も全体も等価に (つまり数的に絶対的に) 処理可能であることが前提されることも問題である。

確かにライブニッツは「神的数学乃至形而上学的機械論」 (G VII: 304) という術語や、「神が計算をし、思考すると、世界が生ずる」

(G VII: 191) という表現を用いるものの、こうした文言は比喩に過ぎないということを、普通よりも慎重に踏まえるべきである。ラトナーは次のようにかなり強く注意喚起している。

このような声明の危険性は明白である。……神的数学 (Mathesis Divina) 乃至形而上学的機械論 (Mechanismus Metaphysicus) は、そこに最善を自由に志向する意志が加えられないのだとしたら、不完全だし、或いはむしろ不十分で不毛でさえある (Ratenaу2015: 93)

C) エコバターの比喩——建築、家政、職能等の比喩

三つ目の比喩には、1.2で列挙した建築家、一家の善き父、熟練工、作家等が属する。ライプニッツは建築の比喩をとりわけて気に入っているようで、その登場回数も説明の分量も多い。1.2で引用した建築の比喩では、土地と資金とを最も有益に按配して、住み心地を損なうことなく美しい建物を建てる建築家に、神は似ているとされていた。『弁神論』では更に詳細で立ち入った言及も為される⁸。

神は、いわば偉大な建築家である。建築家は美しい宮殿を築いたという満足感とその榮譽を目的として自分に課している。彼はその建築に関するすべてを考慮する。形態、材料、場所、配置、建築方法、職人、費用などを考慮するのである。その上ではじめて全体の決定を下す。(G VI: 144, T § 78)

私の考えでは、宮殿の構えのように、生活上の快適さよりは美しさの方をよしとして当然であるような場合もある。ただしそれは、美しさと快適さと健康とをすべて一緒に考察した上でそれよりも立派な建物が作れるならば、である。……例えば、健康のために山の北側に城を築くのが最もよいのだが、そうすると城を耐え難いほど醜い造りにしなければならなくなるなら、むしろ南に向かせたいと思う、ということにもなるろう。(G VI: 247, T § 215)

こうした建築の比喩は、予算や土地をめぐる費用対効果や節約という計算のイメージによって最善決定の唯一的決定性や単純さ・法則性を上手く表現している。つまり建築の比喩は、幾何学的比喩の特質を引き継いでいるわけである。しかもこの比喩は、幾何学的比喩が不得手とした最善の「よさ」の性質も上手く表現できる。何故なら建築は明らかにその物理的規模や費用の大小といった単純な量的基準ではなく、むしろそれらが防衛力（城）や優美さ（宮殿）という目的にどれだけ適しているのかといった質的基準で評価されるからである。またこのことは、「最適な形」の部分の評価は全体との関係によって相対的に評価されることも含意している（例えば、急な螺旋階段という建築物の部分的要素は、その建築物全体が何であるかに応じて異なる評価を受ける。宮殿である場合は見た目の壮麗さのために多少の不便に目を瞑るかもしれない。しかし隠居老人の住居である場合、それは看過できない欠点になるだろう）。こうして質的よさと部分の評価の相対性を効果的に表現できるという点では、建築の比喩は芸術的比喩の特質も引き継いでいると言える。

以上のことから建築の比喩は幾何学的比喩と芸術的比喩の双方の特質を併せ持っていると言えよう。ところでここまでは専ら建築の比喩のみを検討してきた。我々はCの冒頭で列挙した残りの比喩と建築の比喩との関係も考えねばならない。

上述した建築以外の比喩とは、要約すれば、紙面を節約する著作家、費用対効果の高い仕事をする熟練工、無駄のない財産の運用をする善き父、である。ライブニッツはこれらについて、建築家の比喩ほど熱心に詳述しないのだが、いずれも目的に適った高い技術を持つ者であることは見て取れる。そこでこれらをまとめて本稿では「エコノミー *oeconomie* の比喩」と呼びたい。こうした括り方は以下に示す様々な事実からして妥当と思われる²⁾。1) 『人間知性新論』の最終節「諸学の区分について」において、ライブニッツは「*エコノミー*の学科 *la faculté économique*」には、「数学的技法と機械的技術、ならびに人間の生存の細部と生活の便に関わるすべて」そして「農業や建築術」が含まれると述べる（Leibniz1990: 416）。2) ライブニッツが上記のように建築家と同列に並べる「善き父」とは煎じ詰めれば家政術に優れた父に他ならない（また別の同列の比喩のいずれもが、経済性の高い技能を有していることは明白である）。3) 善き父の比

喩に使われる(財産の)「運用employer」の語は、「神が慈悲や正義を行使する際の神的恩寵のエコノミー乃至運用l'oeconomie ou l'employ」(G VII: 143, T § 76)というように、エコノミーと同義に用いられる¹⁰。4) ライプニッツは世界の調和した構造をエコノミーと呼び¹¹、また5) 神による世界創造の有り様もエコノミーと呼んでいる(これについては3)でも確認した)¹²。

尚、3)～4)のように神の世界への関わり方や創造された世界の調和的秩序をエコノミーと称することは、ライプニッツに特有の表現ではなく、むしろ古代ギリシャより続く伝統的なものである¹³。但しこの伝統下においては——神の行為を直接表すことは元来できないせいか——エコノミーが比喩であることがあまり意識されていない。そのためこれは所謂「死んだ隠喩dead metaphor」として捉えるべきなのかもしれないが、本稿はライプニッツが建築や職工、家政や著述という生きた比喩を積極的に用いていることを重く見て、あくまでエコノミーを比喩と捉えたい。

2.2. 比喩表現が示唆する神の仕事の驚異

我々は幾何学・芸術・エコノミーの比喩には、それぞれ神の仕事の様々な側面の内、表現し易い得意分野があることを確認した。幾何学はその法則性・決定性・正確さを、芸術はその質的なよさ・調和性・諸部分の全体に対する相対性を効果的に表現できる。しかしながら幾何学が行うのは基本的に全ての対象を数値化し等価に処理する量的操作であるのに対して、芸術が行うのは量的操作に留まらない異質なものを調和させることのように思え、従って両者は相反するように見える。しかしそこでエコノミーの比喩が、その意味の多義性によって、相容れない二つの特質の両立を引き受けている。言うなれば、幾何学と芸術の比喩だけでは我々には矛盾と感ぜられる神の離れ業を、エコノミーの比喩による補助が「いささかでも理解できるようにする」のである。こうして複数の比喩から成る重層構造によってライプニッツは——意図していたかはともかくとして——神の「驚異的エコノミー-l'admirable oeconomie」(G VI: 455, DM § 30, 傍点は筆者による)が最適な図形を算出できる幾何学のように正確でありつつも、芸術のような質的なよさを持つことを上手く

表わしているのだ。

3. 終わりに——AIと神

本稿はライプニッツが無限なる神の世界創造という仕事になんとか肉薄しようとして用いた様々な比喩表現に着目し、これを表現上の特質によって分け、これらが互いを補いつつ協働していることで神の離れ業の「驚異」に迫っていることを明らかにした。ライプニッツ自身がこうした合わせ技を意図していたとは考えにくい、彼の哲学においてエコノミーの比喩に何が託されていたのか、その一端を明らかにできたのではないかと思う。

しかしながら比喩に用いられた様々な諸技術に関わる条件や目的を全て数値化して扱える場合、エコノミーの比喩は（そして芸術的比喩までも）幾何学的比喩に同化・一致するように思える。現代技術の最たる成果であるコンピュータはあらゆる情報を二進数で処理し、我々はそうして得られる大規模な統計データを信頼する。また我々はそうした処理システムで作動するAIにエラーの許されない仕事を託し、更にはAIが戦略ゲーム¹⁴で人間を圧倒し、芸術に挑戦している。このような現状において幾何学的比喩への同化を想定することは奇妙ではない。むしろ比喩を超えて謂わば「神業」が現実化しているとさえ言いたくなる。

互いに異質なあらゆるものを量化して扱うAIのような神、或いは神のようなAI——量化の極限である二進法を確立し、無限を操作する微積分法を発明し、普遍記号法を考究したライプニッツの哲学には、このような神や技術観があるようにも思える。だが同時に、我々は先に引用したラトナーの警告に耳を傾けるべきだ。比喩はあくまで比喩である。「経済的合理性」といって量的基準に基づく効率的な損得勘定が真っ先に想起される現代、エコノミーの比喩に質的次元が含み持たされていたことは、rationalismを考える上でこの先重要になる。とりわけ幾何学的比喩が部分の全体に対する相対性を表現することが苦手であったことは、良くも悪くも示唆的であろう。

[注]

- 1 従って神は悪の存在の原因と言われ得るが、神は悪を意志したのではなく、全宇宙の最善を意志する際に、部分の悪を容認したに過ぎない。そのため神は悪について免責される。これは『弁神論』の核となる主張の一つである。『弁神論』§21-4がこれを簡潔に示している。
- 2 ライプニッツは実際に『弁神論』における自身の立場を法廷の弁護人（答弁者）に喩えている。「ある命題の支持者（答弁者respondens）は、自らの命題を根拠を挙げて説明する必要はない。しかし反対者の論駁に対しては十分に答えなければならない。法廷に立たされた被告defendeurは（通常は）、自分の所有権を証明することも所有の証書を提示することも必要ではない。原告demandeurの言い分に答えるだけでよい」（同:82, T緒§58）。
- 3 ライプニッツは罪人を含んでしまう「諸事物から成る普遍的調和」を「影によって彩られた絵画、不協和音によって引き立った協和音picturam umbris, consonantiam dissonantiis distinguentem」と対応させている（Leibniz2004:32）。
- 4 『弁神論』では引用した箇所以外にも§196, §212などで同じことが述べられる。また他にも『事物の根本的起源』にも見られる（GVII:303-4）。
- 5 厳密に言えばここに挙げたのは幾何学者の比喩と幾何学の比喩である。だが筆者は幾何学者は幾何学の公理に従属的であることを考えればこれらを同一視することに問題はないと考える。
- 6 実際には最善について完全性の最大や本質の量の最大ということをライプニッツは述べるのだが、本稿では最善世界の様態や決定について比喩を媒介に形式的に理解することを目的にするため、これらの問題は括弧に入れておく。
- 7 研究者の中にはオリジナルの芸術的比喩を使う者もいる。佐々木能章は神の仕事を演劇で喩えており（佐々木2002:134-6）、I.エクランドはオーケストラで喩えている（エクランド2009:69-70）（但し、以上二つはCで示す比喩の特徴も多分に備えている）。
- 8 他、世界の容量を「費用即ちその内に最も快適に建物が作られるべき土地」とするならば、その形の多様性は「建物の快適性とか部屋の数と優美さ」に対応する、という言及もある（GVII:303）。
- 9 これ以降のエコノミーに関する記述では「[「エコノミー」概念 原典資料集]（麻生2010:120-237）をおおいに参照した。またoeconomie, économieに該当する語は一律して「エコノミー」と訳した点で参照した邦訳と異なっている。
- 10 邦訳ではl'oeconomie ou l'employを「控えるか用いるか」（著作集6:177）と訳し、エコノミーを「節約」の意で解釈している。しかしこのouは両者の言い換えだと筆者は考える。同じ立場として城戸（2010:45）があり、ここではドイツ語訳でも同様の解釈が為されていることが指摘されている。
- 11 「宇宙の一般的なエコノミーや自然法則の構成」（G IV: 446, DM §21）、「宇宙の構造やエコノミー」（G VI: 236, T §201）。
- 12 他にも、ユダの裏切りという悪を含んでもなおより大きな善を生ずるような神の選択には「驚異的エコノミー-l'admirable oeconomie」（G VI: 455, DM §30）があると述べられる。
- 13 クセノフォンがはじめてエコノミーを主題とする書物『家政論』を著した頃から、神が世界を運営するという表現は用いられ、その後も意味内容の細かい変動はあるものの、ストア派を経て、ギリシャ・ラテンの教父哲学にもこの使用法は引き継がれている。こうしたエコノミー概念の変遷については「〈エコノミー〉の概念史概説——自己と世界の配置のために」（佐々木2015:10-37）で簡潔にまとめられている。
- 14 ライプニッツは神の世界創造の仕方がある種のパズルゲームの最適解に喩える

こともある (G VII: 303-4)。ゲームが有限であることを考えると、有限回数の手続きで最適解が導出できると思われるため、この比喩は幾何学的比喩に属するであろう。

[文献]

- 麻生博之ほか, 2010, 「「エコノミー」概念 原典資料集」麻生博之編『エコノミー概念の倫理思想的的研究 研究成果報告書・補足論集』, 119-237.
- エクランド, イーヴァル, 2009, 南條郁子訳『数学は最善世界の夢を見るか? 最小作用の原理から最適化理論へ』みすず書房.
- 城戸淳, 2010, 「弁論における幸福のエコノミー——ライプニッツのオプティミズムからカントの最高善へ——」麻生博之編『エコノミー概念の倫理思想的的研究 研究成果報告書・補足論集』, 4-56.
- 酒井潔ほか監, 2015-16, 『ライプニッツ著作集 第II期 1-2巻』工作舎.
- 佐々木能章, 2002, 『ライプニッツ術 モナドは世界を編集する』工作舎.
- 佐々木雄大, 2015, 「〈エコノミー〉の概念史概説——自己と世界の配置のために」『ニュクス』1: 10-37.
- 下村寅太郎ほか監, 1988-91, 『ライプニッツ著作集 全10巻』, 工作舎.
- Leibniz, G. W., Gerhardt, C. I. ed., 1875-90, *Die Philosophische Schriften von G. W. Leibniz*, Berlin, Bd. 1-7.
- , Brunschwig, J., ed., 1990, *Nouveaux Essais sur l'Entendement humain*, GF-Flammarion.
- , Beraval, Y., trad., 2004, *Confessio Philosophi; la Profession de Foi du Philosophe*, Vrin.
- Rateau, P., 2015, *Leibniz et le Meilleur des Mondes possibles*, Classiques Garnier.
- Ross, G. M., 1990, "Leibniz and the Concept of metaphysical Perfection," *Studia Leibnitiana*, 21: 143-52.